

<取扱注意>

保護林区分		署等名	保護林名称	面積	設定年	設置目的	調査結果の概要	検討委員会における評価	(参考)局の実施予定等
植物群落保護林	8	上川南部	夕張岳高山植物群落保護林	483.53	H10	夕張岳周辺は、蛇紋岩、かんらん岩などの超塩基性岩帯で、ユウバリコザクラ、ユウバリソウ、シソバキスミレ等の固有種も多く、植物学的にも貴重であり学術研究に資する。	調査は、山頂部に分布する低木群落や蛇紋岩地に出現する超塩基性岩荒原植物を主な対象とした。山頂部にはハイマツ群落とミヤマハンノキ群落がモザイク状に分布している。また、沢筋の雪の堆積する箇所では、ナガバキタアザミやチシマフウロ等が混生する群落がみられる。山頂直下の吹き通しには、蛇紋岩が露出しており、ユウバリソウ群落やユキバヒゴタイ群落等、固有種を含む貴重な群落が成立している。 近年、エゾシカが夕張岳の上部に出現しているため、エゾシカによる高山植物へのインパクトが懸念される。		群落保護林として手を加えず自然の推移に委ねたい。
	9	檜山	チリチリ川保護林(ブナ)	30.24	S33	ブナ天然林の純林で、将来にわたり優良林として保護する林分。	ブナが優占していた(BA合計の90%前後)が、プロット1と2では、林分構造に差異が見られた。 プロット1では、高木層は35mに達しブナが優占し、樹冠も発達している。亜高木層、低木層にトチノキ、ホウノキ等が見られるが、階層はあまり発達していない。草本層では、クマイザサが繁茂しており、ハイスガヤ、クサソテツ等のほか、ブナの稚樹も少し見られた。 一方、プロット2は、高木層はプロット1と比較して低く18m。高木層、亜高木層、低木層ともにブナが優占しており、ハウチワカエデも混生していた。草本層は、クマイザサが繁茂しており、ハイスガヤ、オオバクロモジ、ブナの稚樹等が見られた。		遺伝子解析結果を踏まえ、保護林拡充に向けて周辺森林の調査を検討中。
	10	檜山	ヒノキアスナロ分布北限地保護林	13.00	H12	ヒバ天然分布の北限地帯に位置することから、個体の維持を図り学術研究等に資する。	(調査未実施)		
	11	檜山	ムズルセ川保護林(トドマツ自生地南限)	0.90	S33	トドマツ自生地南限林として、将来にわたって保護する林分。	2つの調査プロットとも、高木層のトドマツを主体とした階層構造を持った林分。いずれのプロットとも、胸高断面積合計で約90%以上の値であった。 高木層は30m、トドマツが優占。トドマツは直径80cmを越える個体もある。亜高木層や低木層にはブナが多く、その他ミズナラ、イタヤカエデ等の広葉樹も多く見られた。草本層は、クマイザサ、オオバクロモジ、ブナ等みられた。トドマツの稚樹はあまり確認されなかった。		稚樹は少ないものの、施業履歴のない群落保護林として手を加えず自然の推移に委ねたい。
	12	檜山	奥尻保護林(離島ブナ林の北限)	258.68	H8	離島のブナ自生北限近くに位置し、良好な天然林が成立している地域として保護する林分。	2つの調査プロットとも、ブナが優占していた。胸高断面積合計で約5～8割の値であった。 高木層は15～17m、ブナが優占する中、ブナ、ダケカンバの大径木が点在している。ブナは直径65cm級の個体も見られるが、樹高は15m程度と比較的低い。 亜高木層もブナが優占しその他、イタヤカエデ等のカエデ類、シナノキ等が見られた。低木層は、ハウチワカエデ、ヒメアオキ等が、草本層はクマイザサが優占度5で繁茂し、その他ツルアジサイ、ヒメアオキ、クルマバソウやカエデ類の稚樹、ブナの稚樹も確認された。		遺伝子解析結果を踏まえ、保護林拡充に向けて周辺森林の調査を検討中。
	13	檜山	千軒岳保護林	958.05	H12	北海道最南端の高山帯において、高山性植生と低山性植生が雪田に混生状態で見られ、地域の自然を代表するものとして保護を図る。	調査は、大千軒岳から中千軒岳に至る稜線部に出現する代表的な群落を対象とした。稜線の風衝部にはミヤマキンバイやタカネオミナエシ等が混生する群落、トウゲブキ、ミネヤナギが優占する群落等がモザイク状に分布し、いわゆるお花畑を形成している。風下側にはチシマザサが面的に優占している。 本調査地は、登山者の利用も少なく、高山植物に与える人為的なインパクトは小さく、今後も現状の高山植物群落が維持していくものと思われる。		群落保護林として手を加えず自然の推移に委ねたい。
	14	檜山	榎川保護林(ヒノキアスナロ、アオトドマツ)	498.60	S63	ヒノキアスナロの自生北限、アオトドマツの南限地帯に位置し、混交林として学術上貴重なことから、大正11年に天然記念物に指定されている林分。	2つの調査プロットとも、ヒノキアスナロが優占していた。胸高断面積合計で約7～8割の値であった。 高木層は30m、ヒノキアスナロが優先し、ミズナラ、アオダモ、ミハリギリ等が混生している。亜高木層、低木層ではヒノキアスナロ、アオダモ等少し見られるが、階層構造は甘い利発達していない。草本層は、チシマザサは薄く、カエデ類やナナカマド、コシアブラ等の稚樹やヒメアオキ、オオバクロモジ等が見られた。 林床にはヒノキアスナロの稚樹も確認された。		群落保護林として手を加えず自然の推移に委ねたい。
	15	檜山	鶺鴒川保護林(キタゴヨウマツ北限)	321.27	S63	キタゴヨウマツはヒメコマツの北方変種とされているが、当地域は、そのキタゴヨウマツの日本海側の北限地として貴重な林分である。キタゴヨウマツは急傾斜地や尾根筋の岩石地に散在的に自生が見られる。昭和3年に天然記念物に指定された。	2つの調査プロットとも、キタゴヨウ、ブナが優占していた。キタゴヨウは胸高断面積合計で約4～5割の値であった。キタゴヨウは尾根部周辺にのみ確認された。稚樹も同様である。 尾根部では、高木層は18m、キタゴヨウ、ブナ、ミズナラ等、亜高木はブナ、低木にキタゴヨウ、ブナ等、草本層はチシマザサは薄い中キタゴヨウ、ブナの稚樹、ハクサンシャクナ、ゲホツツジ等の階層構造を呈する。斜面地は、ブナその他の広葉樹の林分となっている。		群落保護林として手を加えず自然の推移に委ねたい。
	16	渡島	ガルトネル保護林(ブナの人工林)	0.38	S49	ドイツ人のガルトネルが、明治2年に山引き苗を植栽したブナ人工林で、林業上において、ブナ人工林の成功例として意義が高い林分である。	いずれの調査プロットとも、ブナが優占していた。胸高断面積合計で100%に近い値であった。 高木層は30m。高木層、亜高木層ともブナが優占するが、立ち枯れのブナも見られている。低木層にはナナカマド、エゾヤマザクラ、ヤマモミジハリギリ等が見られる。草本層ではミヤコザサが優占度4で見られるほか、ササの薄いところではブナやミズナラ、カエデ類等の稚樹も見られる他、スイカズラ、タチツボスミレ等も見られた。 また、外来種であるニセアカシアの侵入が見られる。		該当署としては、今後とも枯損木等が発生した場合は除去を行い、実生による植栽により次代ブナを育成していくことと、外来種であるニセアカシアの除去を検討するという考えを持っており、局としても支援していきたい。